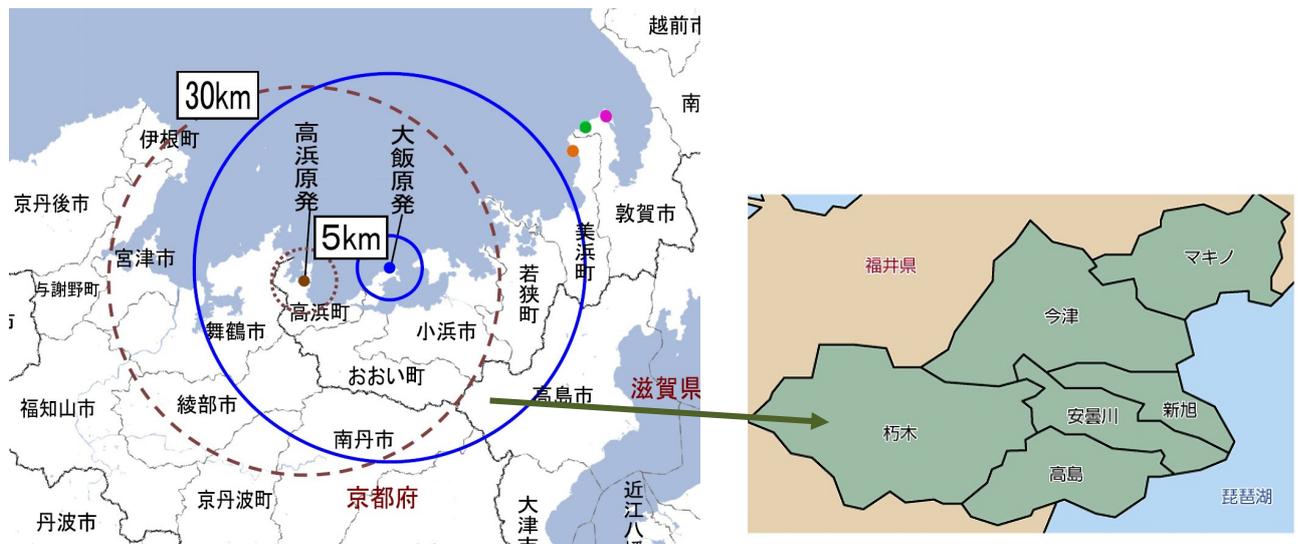


大飯原発から30km圏内 滋賀県高島市 旧朽木村地区の訪問報告

2017. 8. 16

避難計画を案ずる関西連絡会

7月27日、滋賀県高島市の朽木地域を訪問した。滋賀県の避難計画では、朽木地域のうち、大飯原発の30km圏に入る北西側のみがUPZ圏となっている。朽木は山間の細い県道に沿って集落が点在し、災害時に避難経路が途絶する恐れの高い地域である。今回は、この地域の西側にある朽木西小学校区の4地区を訪問した。



【滋賀県の避難計画の概要】

○避難対象者：340名（10地区・163世帯）

避難対象の学校・幼稚園は朽木西小学校1校（児童3名、職員6名）としている。

○避難集合場所：朽木東小学校区の4地区と朽木西小学校区の2地区の計6地区は「朽木公民館」
朽木西小学校区の4地区は「朽木西小学校」

○避難中継所（スクリーニング場所）：

新たに朽木中学校が設定された（以前の県の計画では：新旭体育館・武道館、道の駅藤樹の里
あどがわ・安曇川図書館）

○避難経路：県道783→国道367

→大阪市鶴見緑地

国道367は、福井から避難する住民の県外避難のルートと重なっている。

○避難先：県内避難先は「グリーンパーク想いの森」（大飯原発から約32km）

県外避難先は大阪市の鶴見緑地（拠



県道783号 曲がったガードレール

点避難所)。その先の避難所は未定。

【全体的な特徴など】

1. 高齢者、空き家が多い

今回訪問した旧朽木村の朽木西小学校区4地区も、7月22日に訪問した今津地域と同様、高齢者、空き家が多く、限界集落に近づいている地区だった。朽木西小学校区は人口85名で児童が3名しかいない。空き家は年々増えているとのことだった。

一方、若い人が入ってきている地区もあった。

2. 避難計画が全く知らされていない

行政が説明に来たこともなく、住民の方々はほとんど誰も原発事故の避難計画を知らなかった。今津地区では原発事故の避難訓練が少人数ではあるが一応は行われていた。しかし、この地区では訓練自体が全く行われていなかった。住民の方々は「この地区はのけ者にされている」「置き去りにされている」と語った。

3. 避難の困難性

①地理的に避難は困難を極める

・今津地域とも様子が違った。今津は、集落はそれなりに密集し、わりとすぐに避難道の国道303号に出ることができる。朽木は山の中で、避難道の国道367号に出るまでに細い道（県道783号）を長く走らなければならない。これが避難道路かと驚かされる。道幅は対向車とすれ違うのも困難な所が多く、国道に出るまで一番奥の地区からは約18kmもある。住民の方々は口々に、こんな狭い道1本しかなく、皆が集中するだろうから逃げられないと話した。避難は本当に困難であることが分かった。

・さらに、冬は雪深い地域である。高島市は県道783号は除雪するが、自宅から県道に出るまでの道は住民自らが除雪しなければならない。家の扉が開かないほどの積雪があるとのことで、とりわけ高齢者は県道に出るまでに相当な負担がかかる。

・このため、避難用バスや自治体職員の車が事故後にこの地区に来ること自体が困難だろう。

②避難経路は福井県民の経路と重なる

・朽木住民の避難経路は県道783号→国道367号→大阪市鶴見緑地となるが、国道367号は、福井県住民の県外避難の避難経路でもある。それによって大渋滞が起きること、福井県民が避難するまで待機を強いられることについて不満の声があった。

③高齢者は避難集合場所まで行くことが困難。どこに避難したか連絡が取れない。

・ヘルパーさんの介護無しでは動けない人は、ヘルパーさんがいない時は家を出ることすらできない。

・この地区のほとんどの女性は車に乗らないとのことで、集合場所に車で行くことができない。このためお連れ合いが不在の時など高齢女性は集合場所まで行くこと自体が困難となる。



・この地区の60歳過ぎた人は携帯電話を持っていないとのこと。このため、子どもが市街区に住んでいる場合、仮に県外避難となった場合、最終避難所が示されていない今の避難計画では、避難した親との連絡が取れない。

④安定ヨウ素剤は地区住民の分も含め、朽木西小学校に備蓄してあるが、配布・服用は事故後に自治体職員等が来てから指示することになっている。

住民のほとんどは安定ヨウ素剤が朽木西小学校に備蓄してあることを知らなかった。

⑤住民はほとんど誰も県内外の避難先を知らなかった。県内避難先が「グリーンパーク思い出の森」とであると伝えると、原発から近すぎるとの声があがった。

⑥朽木西小学校の避難計画は、授業中に事故が起きた時の対応等、具体的などころはまだ話し合われていなかった。

【避難道は細く長い山道】

各集落は山間の県道783号沿いに点在。この県道が唯一の避難道であるが、非常に細い道路であることが分かった。対面通行できないほどの細い道幅の箇所、土砂災害が起きやすそうな箇所も多くみられた。ガードレールはボコボコに曲がっていて、車の接触が絶えないようだ。

小さな巡回バスが1日5往復していた。今津地域のバスは少なかったが、今津よりも山奥なので、バスの本数は多いのかもしれない。



巡回バス

【訪問した地区・学校で聞いた話】

◆桑原地区

◇80代の一人暮らしの男性

足が悪く、室内でも簡易の車いすだった。呼びかけてから出てこられるまで時間がかかる。しっかり座れないため、訪問した2名でにわか介護職員となり、車いすに座る手伝いも。ヘルパーさんが毎日来てくれるそうだが、帰った後は次の日まで一人で、外との連絡も取れないようだ。避難計画については全く知らないとのこと。原発事故になれば、ここに残るだけだろうというような話をされていた。ヘルパーさんは遠く離れた朽木東小学校地区から通われているようだ。

◇70歳くらいの女性（お連れ合いと二人暮らし）

・降雪はすごく、2mくらい積もったことがあり、その時は家の戸が開かなかった。市は県道783号の除雪は行うが、家から783号に出るまでの道は除雪してくれない。ここは歳を取ったら住める場所ではない。



民家1軒1軒が離れている

・原発は今まで止まっても何も支障はなかったのに、何故再稼働するのか。

◇70歳男性（母親とお連れ合いと3人暮らし）

狭い道に皆が集中したら逃げられない。避難先も聞いてない。役所は避難計画について説明に来たことがなく、役所に問い合わせを

してみる。

◆古屋地区

この地区は、今はここに住所を置いておらず、滋賀県の他市や京都府に住居を持ち、たまにこの地区に帰ってきている人が多い感じだった。

◆小入谷地区

◇避難については行政と少しは話しているそうだが、ヨウ素剤のこと等も心配されているという方がおられた。

◇30歳代くらいの女性

ヨウ素剤が学校に備蓄してあることは知らなかった、それなら、各戸に事前配布してほしい、市とも話しをしてみる。

◇70歳代くらいの女性（お連れ合いは他界。息子さんは休日のみ帰ってこられるよう）

- ・避難計画と言われても、この辺は若者がおらず、高齢者ばかりで、避難できない。若者は皆、外に出てしまい、休日に少し帰ってくる程度。
- ・この辺のほとんどの女性は車に乗らないため、集合場所に車で行くことができない。

- ・この辺の60、70過ぎた人は携帯電話を持っていないため（最終避難先が決まっていない今の計画では、どこに避難したのか家族等と連絡が取れず）避難先で何も分からなくなる。

- ・高島市は何も言ってくれない、来てくれない。市長も選挙の時も来たことがない。この地域は本当にのけ者にされている。福井か滋賀かどっちの人間か分からない感じだ。



一番奥の地区へ続く道

◆朽木西小学校（中牧地区）

校長先生に話を聞いた。この学校が朽木の4地区の避難集合場所だが、避難計画について具体化はされていない感じだった。



朽木西小学校

安定ヨウ素剤は子ども・職員・地域の人のはこの学校で備蓄されているとのこと。ただ、配布・服用は、医師や自治体職員が遠く離れたところから、細い道を通ってやってきてからの話だ。それでは時間がかかり効果がないのではと聞いても、あまりはっきりした答えはなく、「学校だけでやれることではないので」という感じで、硬い対応だった。「集合してからの避難も市や県が行うだろう」と話され「施設ごとに避難計画を立てる」というガイドラインからは

遠いものだった。子どもたちは2キロ圏内なので歩いて通学しているということだったが、「子どもたちを、学校から直接避難所に送ることも考えられるが、親との連絡や引き渡しについて検討されましたか」という問いかけで、少し現実感をもってもらえたようだ。